The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『デュランデ城』におけるダイクシス（その１）：版によってher-とhin-が入れ替わる事例を中心に
Author(s)	瀧田，恵巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 30-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91547
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『デュランデ城』におけるダイクシス（その１）

—版によって her-と hin-が入れ替わる事例を中心に—

瀧田恵巳

1. はじめに

Alewyn(1957/1974)によると、Eichendorff の作品においては Hier「ここ」の導入手段として her-と hin-が風景描写に多用され、また her-の方が hin-よりも頻繁に用いられる。この見解を受け、瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)では、Jahn(1937)と Ehlich(1985)の学説を紹介し、Ehlich(1985)が扱った『デュランデ城 Das Schloss Dürande』を取り上げ、その her-と hin-の用例を風景描写とそれ以外に分けて割合を算出した。さらに Alewyn(1957/1974)の Hier「ここ」を場面の中心を占める知覚主体（登場人物）と設定したうえで Hier/Origo と呼び、これが her-の示す方向の目標及び hin-の示す方向の起点を占めるかどうかについて検討した。

その結果、her-と hin-の全用例における風景描写の割合は、her-が総数 28 例中 6 例で 21.4%、hin-が総数 39 例中 2 例で 5.1%に過ぎない（瀧田 2021：25 [表 2]）ことが明らかになった。この割合からいえば風景描写は her-と hin-のプロトタイプ的用法と判断するのは難しい。また風景描写の用例数に関しては、her-の方が hin-よりも多いという点で her-の方が多用されるという Alewyn(1957/1974)の指摘は妥当といえる反面、これらの用例は herauf と herüber と hinein に限定されるため、-auf と-über に関しては確かに her-の方が優勢ではあるが、-ein に関しては hin-の方が優勢である(瀧田 2021:25[表 2])。

風景描写における Hier/Origo の導入に関しては、her-が示す方向の目標側に Hier/Origo が導入される用例数は 66.7%という比較的高い割合を占めるが、hin-の示す方向の起点側に導入される用例数の割合は 0.0%である（瀧田 2021:25 [表 3]）。この分析により、風景描写の herauf と herüber の用例については、方向の目標側に存在する知覚主体が遠くからの音響や光の運行を受け止めるような描写がなされる傾向が強いが、hinein の示す方向には、起点側の知覚主体から離れていくという遠近効果は薄いということが示された。

以上のように瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)の分析結果によると、Alewyn(1957/1974)の指摘する風景描写における her-の特徴は認められる一方、hin-の特徴は認められない。

なお風景描写以外の用例については、her-の示す目標側に Hier/Origo が認められる割合は 54.5%、hin-の示す方向の起点側に Hier/Origo を位置づけられる例の割合は 59.5%であった（瀧田 2021：26 [表 4]）。これを風景描写の割合（her- : 66.7%、hin- : 0.0%）と比較すると her-はやや少ないが、hin-に関してははるかに高い割合を占めている。また herunter と herauf と hinüber に関しては、最も高い割合（100.0%）を占めている。このように風景描写以外の用例においては her-の表す方向の目標側及び hin-の表す方向の起点側に Hier/Origo が位置づけられる用例数の割合は比較的高いと言えるものの、その反例はそれぞれ全体の 40%

以上を占めている。

こうした方向の目標側及び起点側への Hier/Origo の導入に関する 40%以上の反例のうち、明らかに her-の示す方向の目標側に Hier/Origo の導入が認められない事例は heraus と herein において顕著に見られた。その中でも次の herein の例は特に際立っている。

(1) Da ließen sich auf einmal unten Stimmen vernehmen, drauf hörte man jemand eilig die Treppe heraufkommen, immer lauter und näher. „Ich muss herein!“ rief es endlich an der Saaltür, [...]. (SD:32)
そのとき突然，階下で人声がしたと思うと，誰かが急いで階段を駆け上がってきた。足音はしだいに大きく近づいてきて，とうとう広間の扉のところで「入れてくれ！」という叫び声がした。（省略）(208) （瀧田 2019 : 28）

これは部屋の外にいる話し手が室内にいる相手に呼びかける会話文で、Hier/Origo の導入先として最も典型的な知覚主体であるはずの話し手は起点側に位置する。この場合話し手は内部空間側にいる相手の立場をとっているとも考えられる。しかし次の例(2a)では、内部空間に出来事を体験する人物がいないにも関わらず、herein が使用されている。

(2a) In der schönen Provence liegt ein Tal zwischen waldigen Bergen, die Trümmer des alten Schlosses Dürande sehen über die Wipfel in die Einsamkeit herein; von der andern Seite erblickt man weit unten die Türme der Stadt Marseille; wenn die Luft von Mittag kommt, klingen bei klarem Wetter die Glocken herüber, sonst hört man nichts von der Welt. (SD:3)
美しいプロヴァンス地方の緑ふかい山々にかこまれて，ひっそりとした谷間がある。そこからふり仰ぐと，木々の梢をこえた高みに，デュランデ古城の廃墟がじっとこちらを見下ろしており，目を転じてはるか下方を見晴らせば，遠くにマルセイユの町の尖塔がかすんでいる。澄みきった日には，南風にのって鐘の音がひびいてくることもあるが，そのほかには，世間の物音は何一つここに届くことはない。(176) （瀧田 2019 :28）

この事例は物語冒頭部分で, herein は擬人化された「（デュランデ古城の）廃墟 Trümmer」が「寂寥 Einsamkeit」の中を見る方向を表す。それ以外に登場人物と呼べる存在はこの時点でまだ出現していないため，方向の目標側に Hier/Origo は存在しえない。

方向の目標側への Hier/Origo の導入が認められない heraus の事例としては、話し手や中心的な登場人物の見る動作や、発言行為、譲渡行為の例が挙げられる。これらにおいては全て、場面の中心を担う知覚主体である Hier/Origo が動作方向の起点側に位置する（瀧田 2019 :25-26）。次の例(3a)は、登場人物レナーテ Renate とガブリエレ Gabriele による会話の一部である。二人はある夜更け、庵室の明け放った窓辺に腰かけており、そこから修道院

の庭園やはるかに広がる田園を見渡している。話し手レナーテは聞き手ガブリエレと共に屋内にいるにもかかわらず、ここでは heraus が用いられている。

(3a) „Wie du auch so allein im Dunkeln durch den Wald gehen kannst“, sagte Renate wieder; „ich stürbe vor Furcht. Wenn ich so manchmal durch die Scheiben heraussehe in die tiefe Nacht, dann ist mir immer so wohl und sicher in meiner Zelle wie unterm Mantel der Mutter Gottes.“ (SD:10-11)
「あなたなら，こんな暗闇のなかを，ひとりぼっちで，森をぬけて行けるでしょうけれど」とレナーテは言った。「私なら恐ろしくて死んでしまうわ。窓ガラスごしに深い夜の闇をながめるとね，私はいつも，この庵室のなかにいることが，マリアさまのマントにくるまれているように, とてもありがたく, 心強く感じられるのよ」(184-185)
（瀧田 2019 :26）

このように瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)によると、her-は風景描写であるか否かに関わらず目標側への Hier/Origo が導入される傾向が高いものの、その反例はあり、中でも特に herein と heraus には顕著に見られる。

この点に関連してさらに特筆すべき事実がある。瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)で扱った Reclam 版の『デュランデ城』の例文のうち、ここで再掲した herein の例(2a)と heraus の例(3a)と同じコンテクストで、Manesse 版では次のように hinein と hinaus が用いられている。つまり her-と hin-が入れ替わっているのである。

(2b) In der schönen Provence liegt ein Tal zwischen waldigen Bergen, die Trümmer des alten Schlosses Dürande sehen über die Wipfel in die Einsamkeit hinein; von der andern Seite erblickt man weit unten die Türme der Stadt Marseille; wenn die Luft von Mittag kommt, klingen bei klarem Wetter die Glocken herüber, sonst hört man nichts von der Welt. (SDM:271)

(3b) „Wie du auch so allein im Dunkeln durch den Wald gehen kannst“, sagte Renate wieder; „ich stürbe vor Furcht. Wenn ich so manchmal durch die Scheiben hinaussehe in die tiefe Nacht, dann ist mir immer so wohl und sicher in meiner Zelle wie unterm Mantel der Mutter Gottes.“ (SDM:282)

このように版によって her-と hin-が入れ替わる事例にはどのような相違があるのだろうか。またこれは herein と heraus における方向の目標側へ Hier/Origo の導入に対する反例の多さにも関連するのだろうか。

さらにこれらの用例の顕著な特徴として、sehen の自動詞用法との結合が挙げられる。

つまりこれらの文は情景描写にも深くかかわると考えられる。特に herein と hinein のバリエーションに関しては、それぞれ Ehlich(1985)と Lindemann(1980)による情景描写に関わる分析が存在し、単独でもすでに一つの課題として注目されていることがわかる。

以上のことから、本論文では 2 で herein と hinein のバリエーションに関する先行研究を紹介し、3 で herein と hinein 及び heraus と hinaus のバリエーションを他の用例や用法に関連づけて分析し考察する。最後に 4 でまとめと今後の課題を提示する。

2. herein と hinein のバリエーションに関する先行研究

2.1. Ehlich(1985)による herein の解説

例(2a)の herein について Ehlich(1985:253)は次のように解説している。

(4) Die Trümmer ››sehen herein‹‹; indem Eichendorff so schreibt, gibt er dem Leser einen Platz in der Geschichte, sein Hier: die Origo des Lesers ist die Einsamkeit. (Ehlich 1985:253)

上記の解説によると、「廃墟 Trümmer」が「こちらの内部空間の中を見る sehen herein」という Eichendorff の描写により、読者は物語中の居場所を与えられ、それが読者の「ここ」即ち「読者の Origo (die Origo des Lesers)」となる。読者の Origo を寂寥とする解釈は、先述の例(2a)に示されるように、herein の目標となる内部空間が先行する前置詞句 in die Einsamkeit の「寂寥 Einsamkeit」であることに基づく。

Ehlich(1985)の提唱する読者の Origo は、瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)が設定した物語場面の中心人物に導入される Hier/Origo とは明らかに性質を異にする。Ehlich(1985)の解説に基づくならば、読者の Origo が置かれる内部空間としての寂寥は、その直前の文の「緑深き山々に囲まれた谷 ein Tal zwischen waldigen Bergen」という空間の状態であることが容易に連想される。しかし物語の冒頭で未だ登場人物は現れていないため、ここには物語場面の中心を担う知覚主体としての Hier/Origo を導入することは出来ない。Ehlich(1985)が読者の Origo を設定する要因もこの点にあると考えられる。

Ehlich(1985)自身は言及していないが、「谷」に Origo が置かれるという見解は、後続の文脈からみても整合性がある。以下の例(5)は(2a)に続く文章である。

(5) <u>In diesem Tale</u> standen ehemals <u>ein kleines Jägerhaus</u>, man sah's vor Blüten kaum, so überwaldet war's und weinumrankt bis an das Hirschgeweih über dem Eingang; in stillen Nächten, wenn der Mond hell schien, kam das Wild oft weidend, bis auf die Waldeswiese vor der Tür. Dort wohnte dazumal <u>der Jäger Renald</u>, im Dienst des alten Grafen Dürande, <u>mit seiner jungen Schwester Gabriele</u> ganz allein, denn Vater und Mutter waren lange gestorben. (SD:3)

<u>この谷間に</u>，以前，一軒の猟師小屋があった。咲き匂う花々で家が埋もれてしまうほど，

あたりには鬱蒼と木が繁り，葡萄の蔓は戸口に欠けた鹿の角にまでからみついていた。月の明るい静かな夜には，よく，森の獣が草をはみつつ，家の前の草地にまで出かけてくるのだった。この家に，当時デュランデ老伯爵に使える猟師レナルトと妹ガブリエレが住んでいた。父親も母親もはやくなくなったので，彼らは全く二人きりの兄弟だったのである。(176)

「この谷間に in diesem Tal」とあるように、(2a)の直後「谷間」は dieser によって指示されている。Diewald(1991:227f.)」が指摘するように dieser は Origo を含有する。この点で「谷間」に置かれる「読者の Origo」はその後の文脈に合致している。さらにその後、かつて谷にあった「一軒の猟師小屋 ein kleines Jägerhaus」を通して、当時そこに住んでいた猟師「レナルト Renald」とその妹「ガブリエレ Gabriele」が登場する。この二人の登場人物はこの物語の中心人物となる。

このように herein により「寂寥」を通じて谷へと誘われる「読者の Origo」が想定されるならば、物語場面の中心は文脈上ごく自然に中心人物（Hier/Origo）に移行する。

2.2. Lindemann (1980)による hinein の解説

例(2b)の hinein に関して、Lindemann (1980)は次のように解説する。

(6) Wir finden eine der bei Eichendorff immer wiederkehrenden Landschaften, in denen trotz einer Fülle von Raum- und Zeitdeiktika gerade der Raum merkwürdig unbestimmt ist. [...] Weiter läßt sich zwar noch festhalten, daß „ein Thal zwischen waldigen Bergen“ liegt, die Raumbestimmung: „von der andern Seite“ in Hinblick auf die Stadt Marseille ist aber wieder nur auf die Ruine des Schlosses bezogen, und dessen Position in Relation zu dem Tal wird wiederum nur sehr ungenau bestimmt, wenn es heißt: „die Trümmer ... sehen über die Wipfel (!) in die Einsamkeit hinein.“ (Lindemann 1980:61)

Lindemann (1980:61)によると、冒頭の風景描写における空間的・時間的なダイクシス表現の多用にもかかわらず、奇妙なことに空間そのものが定まらない。「谷が緑深い山々に（囲まれている）ein Thal zwischen waldigen Bergen」という部分に関しては、確かに位置は確定しているが，マルセイユの町を見る「別の側から von der andern Seite」という表現が関連づけられるのは，城の廃墟しかない。これを「廃墟が梢越しに孤独をのぞき込んでいる die Trümmer ... sehen über die Wipfel (!) in die Einsamkeit hinein」という先行文脈と考え合わせると谷との関係はさらに非常に不明確になると主張する。

この Lindemann (1980)の混乱の原因は、おそらく冒頭の hinein により風景描写の視座を「廃墟 die Trümmer」におく解釈をしたためであろう。まず(2b)の「別の側から von der

andern Seite」の「別の側」とは文脈上マルセイユの側であることは確定している。ではこのマルセイユは何を基準とし何と対立した「別の側」なのだろうか。Ehlich(1985)の解釈のよる herein の事例では、マルセイユは読者の Origo が置かれる「谷間」を基準として「廃墟」に対立する「別の側」に位置づけられる。つまりマルセイユと対立するのは「廃墟」である。それに対して hinein の事例において描写の視座を「廃墟」に置くとすれば、「谷間」は見られる対象となり、これがマルセイユと対峙する。そしてマルセイユから響いてくる鐘の音は「廃墟」から描写される。その後描写は再び「谷間」に移され、(5)の「この谷間には In diesem Tale」のように dieser で指示される。視座が置かれているはずの「廃墟」でも、これまで描写されてきたマルセイユでもなく、マルセイユに対立する「谷間」を、再び持ち出し dieser で指示することは文脈上非常に不自然である。「谷間」をトピックとして扱うのであれば、初めから描写の視座とすべきであるし、先行文脈のマルセイユの描写は廃墟を介したものであるために、トピックであるはずの谷間の表象にとって非常に関連の薄い希薄なものとなり、全体として統合性に欠けるコンテクストとなる。それに対して、Ehlich(1985)による(2a)の herein の解釈では、読者の Origo が「谷間」に設定され、「廃墟」とマルセイユは谷間から眺められる対象として「谷間」の表象に統合される。

2.3. 先行研究から得られる知見

ここで紹介した先行研究において her-の目標側及び hin-の起点側には、読者の Origo と描写の視座が想定されている。これらは読者（物語場面を受けるという点で厳密に言えば「聴き手」）と語り手に由来するものであり、瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)で仮定した物語内の登場人物による中心点 Hier/Origo とは次元を異にする概念である。

3. 分析と考察

3.1. herein と hinein

2 で述べたように Ehlich(1985)は(2a)の herein を文脈上問題視しないのに対して、Lindemann(1980)は(2b)の hinein により空間がさらに不明確になると指摘する。したがってこの文脈では hinein よりも herein の方が自然なものと判断されていることがわかる。

それではなぜ hinein というバリエーションが存在しえるのだろうか。

第一の要因として、hinein が目標と結合する傾向が強いという点が挙げられる。瀧田(2021:21-24)は Reclam 版の hinein の用例全 9 例を挙げているが、そのうち 7 例では、例(7)のように hinein は in の目標を表す 4 格支配の前置詞句と共起している。残り 2 例においては、例(8)のように、hinein は先行文脈の内的空間への方向（例(8)では「レナルトの家」への方向）を示している。

(7) Er ging nun an prächtigen Landhäusern vorüber durch die langen Vorstädte immer tiefer in das wachsende Getöse <u>hinein</u>, [...] (SD:19)

彼は郊外の幾多の壮麗な別荘を通りすぎ、高まりゆく轟音にますます近づいていった。（省略）(194)

(8) „Was macht Ihr hier in Renalds Haus?“ sagte er. „Ich bin müde, ich will hinein.“ (SD:29-30)

「おまえはレナルトの家で何をしている？俺は疲れている。入って休みたいのだ」(206)

例(2b)においても例(7)と同様に、in die Einsamkeit という目標を表す in 前置詞句が先行している。こうした目標と結びつくことから hinein が選出されたと推定される。

なお目標と結合する傾向は、hinein の非空間的用法においても指摘することができる。瀧田(2008)によると、「だます、だまされる」、「不快な状況に陥る、陥れる」といった意味においては herein と hinein はどちらも用いられる一方、目標を表す 4 格支配の in 前置詞句と共起する「自分の中に取り込む」、「ありもしない意味を捏造して勝手に読み込む」、「口出しする」と表現には hinein しか用いられない。

第二の要因は結合する動詞 sehen にあると考えられる。例(2a)のように herein と共に用いられる場合は、見る存在であるはずの「廃墟」が「谷間」から見られる存在となる。つまりここに視座の分裂が生じる。それに対して例(2b)の hinein の場合には風景描写の視座は「廃墟」側に置かれるため、視座の分裂は起こらない。

以上のように、hinein を選択する要因として、目標との結合と視座分裂の回避が考えられる。

一方、文脈上自然なものとして受け入れられる herein には視座の分裂が認められるが、その要因は sehen の用法そのものにあると考えられる。自動詞用法の sehen には例(9)のように「(ものが) 見えている」現象を表す場合と例(10)のように「見る」という知覚行為を表す場合がある。前者の主語は見られる対象であり、後者は見る行為の動作主である。

(9) Nur die höchsten Gebäude, Berggipfel sahen aus dem Nebel. (BW:713)

(10) Man soll nicht in die Sonne sehen. (BW:712)

例(2a)の herein の事例において sehen の主語である廃墟は例(10)のように擬人的に知覚行為の主体となるとともに、herein という方向表現により風景描写の視座から見られる対象でもあることから例(9)の要素も併せ持っている。この herein の事例のように見る動作主が同時に見られる対象となる事例は、逆に言えば自分が見ているはずの対象が実はこちらを見ていることになるが、こうした事実や認識は随所に見いだすことができる。例えば自動車のヘッドライトで照らされるとき、自分はライトを見るとともに自分の姿も見られていると察知するであろうし、見上げた月や星にこちらを見下ろす顔をイメージすることもできる。

さらに herein には空間関係に基づく傾向も認められる。先述の例(1)では Hier/Origo を担うはずの話し手が起点側に位置しているが、目標となる内部空間にはこの物語の中心的

人物である伯爵が聞き手として存在する。つまりこの事例は、内部空間にいる聞き手に視座を置いたものと解釈することもできる。こうした例から考えると、herein は、特に聞き手など視座が置かれやすい存在が目標の内部空間に存在する状況で用いられ、Hier/Origo と対立する視座を有する傾向があるといえる。こうした聞き手の視座は、Ehlich(1985)の提唱する「読者の Origo」と、伝達の受け手によるという点で一致する。

3.2. heraus と hinaus

例(3a)の heraus と例(3b)の hinaus もまた、herein と hinein の事例と同様、動詞 sehen と共起する。この場面は話し手レナーテが窓の外を見る動作である点では、例(3b)のように Hier/Origo から離れる方向を指す hinaus を用いる方が適切である。事実、先行文脈でレナーテが単に庵室の外を眺める場面では、Reclam 版でも hinaus が用いられている。

(11) Die Heimchen zirpten unten auf den frischgemähten Wiesen, überm Walde blitzte es manchmal aus weiter Ferne. „Da lässt mein Liebster mich grüßen“, dachte Gabriele bei sich. – Aber Renate blickte verwundert <u>hinaus</u>; sie war lange nicht wach gewesen um diese Zeit. (SD:10)

刈り取られたばかりの下の草地では蟋蟀が鳴き，森の上空にはいくたびか遠い稲妻が走った。あれはあの人が私に送ってくれる挨拶なんだわ，とガブリエレはひとり思うのだった。―だがこの時刻に起きていることの久しくなかったレナーテは，驚いて<u>外をながめ</u>ながら言った。(184)

しかし例(3a)のように heraus を用いると、herein の例(2a)と同様に視座を分裂させ、庵室内の Hier/Origo と対立する庵室外の視座を想定することができる。話し手レナーテは確かに自分が窓の外を見る動作に heraus を用いているが、それはその後庵室の中にいる自分自身の描写につながる。「マリアさまのマントにくるまれているように，とてもありがたく，心強く感じられる so wohl und sicher in meiner Zelle wie unterm Mantel der Mutter Gottes」という後続の描写は、聖母のマントに包まれたように心強く感じる自分自身を明らかに庵室の外の立場から想像する内容である。

以上のように、動詞 sehen と Hier/Origo との関係に基づくことにより、(3b)の hinaus については Hier/Origo の側に視座が置かれ、(3a)の heraus については Hier/Origo と対立する視座が目標側に置かれると説明することができる。

このように heraus に関しても herein と同様に描写の視座が Hier/Origo と対立するという解釈が成り立つ。そしてまた heraus にも herein の例(1)と同様に Hier/Origo が起点側に位置する例が見られる。例(12)の heraussagen は発言行為を表し、Hier/Origo に相当するレナルトは発言行為の行為者としてその行為の方向の起点側に位置する。例(13)の herausgeben は譲渡を表すが、Hier/Origo を担う話し手は行為者として起点側に位置する。

発話行為も譲渡もそれぞれ目標側に聞き手と譲渡する相手という受け手を必要とする行為であり、視座を受け手側に置くという解釈が成立する。

(12) Renald bat nun ehrerbietig um kurzen Urlaub zu einer Reise nach Paris. Auf die Frage des Grafen, was er dort wolle, entgegnete er verwirrt: Seine Schwester sei dort bei einem weitläuftigen Verwandten – er schämte sich herauszusagen, was er dachte. (SD:18-19)
レナルトはうやうやしく，巴里へ行くための休暇を願い出た。何をしに行くのかと問われると，彼は狼狽して答えた。「妹が当地の遠い親戚の家に滞在しておるのでございます」―彼は自分の考えを口にすることを恥じたのである。（194）

(13) Und rasch zu Renald gewandt, rief er: „Und wenn ich deine ganze Sippschaft hätt', ich gäb' sie nicht heraus! [...]“ (SD:24)
そしてさっとレナルトの方を向くと叫んだ。「もし仮におまえの一族を全部ここに隠していたとしても，俺はわたさぬぞ！（省略）」（199）

4. まとめと今後の課題

本論文では、同じ文脈に見られる herein と hinein 及び heraus と hinaus のバリエーションについて、その相違と成立要因について検討した。これらはいずれも動詞 sehen との結合においてみられる現象であるという点から、特に her-において sehen の動作主である起点側の Hier/Origo と「読者の Origo」や描写の観点という目標側に位置する視座との分裂を指摘するに至った。さらに視座の分裂は herein と heraus の他の用法にも認められ、特に受け手が目標領域を占める傾向も認められた。ただし視座の不一致は hin-においても想定される。廃墟が谷を見下ろす hinein の視線も、レナーテが庵室の窓から外を見る hinaus の視線も起点となる知覚主体が占める Hier/Origo とそれを描写する観点との間には絶妙なズレがある。つまり「話者への方向」及び「話者から離れる方向」という her と hin の原義における「話者」とは、場面の中心である Hier/Origo とは別の、場面からも解放された描写の視座、いわば視点である。ただし hin の「離れる方向」という意味記述に関しては、一つ留保すべき点がある。それは既に瀧田(2021)において指摘した用例のうち、場面の中心である Hier/Origo の移動を伴う登場人物の移動の方向を表す用例に現れており、必ずしも移動による遠近方向を表すとは言えない。今後はこうした事例について検討する。

参考文献

Alewyn, Richard **(1957/1974)**: Eine Landschaft Eichendorffs. In: Alewyn, Richard: *Probleme und Gestalten: Essays*, Frankfurt am Main: Insel, pp. 203-231. (Erstdruck: *Euphorion* 51, 1957, pp. 42-60.**)** (渡辺洋子訳「アイヒェンドルフの風景」『ドイツ・ロマン派論考』1984 年, 303-340.)

Bühler, Karl **(1934/1982)**: *Sprachtheorie: Die Darstellungsfunktion der Sprache*. Stuttgart, New York: Fischer, 1982 (Nachdruck von 1934).（脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論　言語の叙述機能　上巻』クロノス，1983.）

Diewald, Gabriele Maria **(1991)**: *Deixis und Textsorten im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.

Ehlich, Konrad **(1985)**: Literarische Landschaft und deiktische Prozedur: Eichendorff. In : Schweizer, Harro (Hg.): *Sprache und Raum*, Stuttgart: Metzler, pp. 246-261.

Jahn, Gisela**(1937)** : *Studien zu Eichendorffs Prosastil*. Leipzig: Mayer & Müller.

Lindemann, Klaus(1980): *Eichendorffs Schloß Dürande*. Paderborn, München, Wien, Zürich: Schöningh Verlag.

瀧田恵巳**(2008)**：「入る方向表現による非空間的意味と内外関係について　ー現代ドイツ語 herein/hinein の分析と試論ー」『言語文化研究』第 34 号　pp. 19-39. 大阪大学言語文化研究科

瀧田恵巳**(2018b):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その１）」『言語文化共同研究プロジェクト 2017・ 時空と認知の言語学Ⅶ』 pp. 21-30.　大阪大学大学院言語文化研究科

瀧田恵巳**(2019):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その２）」『言語文化共同研究プロジェクト 2018・ 時空と認知の言語学Ⅷ』 pp. 21-30.　大阪大学大学院言語文化研究科

瀧田恵巳**(2020):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その３）」『言語文化共同研究プロジェクト 2019・ 時空と認知の言語学Ⅸ』 pp. 1-10. 大阪大学大学院言語文化研究科

瀧田恵巳**(2021)**:「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その４）」『言語文化共同研究プロジェクト 2020・ 時空と認知の言語学Ｘ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科

例文出典

Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden: Bd.3. hrsg. v. Krämmer, Hilderad; Zimmermann, Harald, Anstalt, Stuttgart:F. A. Brockhaus Wiesbaden Verlags , 1981.　[略号 BW]

Eichendorff, Joseph von : *Das Schloss Dürande*. Stuttgart: Philipp Reclam jun. , 2011. [略号 **SD**]

Eichendorff, Josef von: Das Schloß Dürande. In: Bergengruen, Werner (Hrsg.) *Erzählungen/ Josef Freiherr von Eichendorff,* Zürich: Manesse, 1988, pp.269-334. [略号 **SDM**]

アイヒェンドルフ，ヨーゼフ・フォン（渡辺洋子訳）:「デュランデ城」　前田道介編『アイヒェンドルフ（ドイツ・ロマン派全集第六巻）』国書刊行会，1983,　175-228.